

第61号 50円

昭和54年5月25日

内容

文学にとっての未来	1
千人会	2,3
第6回国際学生セミナー	4
香典返しの寄付30万円うける	6
寄付金報告	6
寄贈図書	6
卒業にあたって一言	7
事業部だより	8
館長日記から	9
利用状況	9,10

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行 大学セミナー・ハウス
財団法人
 <所在地>
 東京都八王子市下柚木
 (☎192-03)
 電話 0426-76-8511~3
 振替口座 東京 74590番
 <東京事務所>
 東京都中央区日本橋本町3-3
 三井銀行本町支店ビル5階
 三電 東京 飯田3961
 編集・発行人 飯田宗一郎
 製作 中央公論事業出版

「文学にとっての未来」といういささか大風呂敷すぎるテーマを、次の五つの論点から私なりに考えてみたい。

まず第一は、文学的想像力は本質的に過去にかかわっている、という点である。聖書の冒頭に「神始めに天地を創り給へり」とあるように、日本の古事記をはじめ民話、神話、聖典のたぐいはすべて過去形で書かれている。ところが未来を壮大に描いて見せるようなSFも、ヴァージニア・ウルフのように意識の流れや内的な独白を扱った二〇世紀小説も、そのほとんどが実は過去形で書かれているのである。回想録や自伝、歴史小説というジャンルが記憶に深く結びついているのは当然だが、現実にあったことではなく、あり得ること、あるいはあって欲しい(欲しくない)ことを想像で作りに上げていくはずの小説がこれほど過去形に執着するのは、果たしてどういふ意味か。吟遊詩人や語部たちは、記憶の中に封じ込めていたものをたぐり出すようにして語ってみせたが、現代の作家もじつは例外ではないのだ。四十年前にポランドからアメリカに移住したユダヤ系の小説家アイザック・シンガーは先ごろノーベル賞を受けたが、彼の語り口からは、被圧迫者としてあるユダヤ民族の歴史がそのずから浮かび上がってくる。トーマス・マンが『ヨゼフとその兄弟たち』という晩年の作品について

「自分は非常に深い人類の記憶の井戸から汲み上げてこれを作った」と述べているが、シンガーもまた、井戸の守り手といえるだろう。

このように過去に根深くかかわってきた文学が、一体どのように過去と未来との間に生きた関係をつくれるのか。文学的想像力はいかにして過去と未来をドラマタイズできるのか。まず最初に問うべき大きな問題がここにある。

第二に文学観・人間観の変遷を一九世紀対二〇世紀という対比の中で捉えて、現代文学が抱えている



文学にとっての未来

東京大学教養学部教授

佐伯彰一

の問題を浮き彫りにしてみたい。

二〇世紀の代表的思想家は誰かと問われたら、私はフロイトの名をまず第一にあげたい。彼は一九〇〇年に『夢の解釈』を著し、人間が内側に抱え込んでいる内なる幼児(無意識)が人間を動かし、時に夢のかたちとなって現われることを明らかにした。これに対して一九世紀とは、良識ある合理的大人(市民)が社会を形成し、歴史を動かしてゆくという一八世紀の啓蒙思想が、いわば大衆化した時代であった。したがって大ざっ

ばに図式化すれば、フロイトの内なる幼児という考え方は、原始人は近代人より劣り、近代人こそ人間のあるべき姿である、という一九世紀常識に対して一撃を加え、果たしてそれほど市民は良識的であるのか、近代人に原始人を軽べつする根拠があるのか、そしてさらには、狂気と正気との関係にまで及ぶ大きな問題を投げかけたのである。

以上は人間の内側で起こったことであるが、二〇世紀には空間的な面でも著しい視野の拡大が行わ

れた。前者が心理学という学問領域で行われたとすれば、後者は一九世紀後半から起こってきた文化人類学の成果によるものである。それまで未開地域といわれていたアフリカやニューギニアなどにおけるフィールド・ワークが、一つの文化はそれ自体のオーガニックな構造を持っている(構造主義)という考え方を導き出し、文明の起源をギリシャに置いたヨーロッパ中心の世界像を崩壊させ、さまざまな文化の相対化をもたらしたのである。

第四に、文学と科学の問題を指摘したい。テクノロジーは大量生産(消費)を生み出し、その加速化現象によって、今やファッションが登場して伝統にとつてかわった趣きすらみとめられる。ところが皮肉なことに最も個性的であるはずのファッションが、大量生産によって規格化されるという思わぬ結果をもたらしたのである。その意味で二〇世紀はいわば大衆化の時代である。芸術の諸領域でも顕著にそれが見られるようになり、オリジナルと複製との区別が困難となった。服装や髪形ばかりでなく、ライフスタイルも世界的に似通ってきている現象を、グローバル・ビレッジ(地球村)の状況と呼んでいるが、私はこれを「世界の江戸化現象」といいかえてみたことがある。その理由は、地球全体が一種の鎖国状況で、どこへ行ってもあまり変化が見られず、ちょうど耕しつくされた江戸時代の爛熟した文化が、異様な服装や変化のあるライフスタイルを生み出さざるを得なかったような状況にわれわれは置かれているからである。テクノロジーがいやが上にも規格化を推し進めていく時代に、江戸は一つのモデルとなる。しかし一方では、これほどエスニックな文化が大きな役割を持つに至った時代はないのであり、そのルーツを探ることによって、普遍化、規格化に対抗しようとするもの

(2ページ4段目へつづく)

千人会

友愛と信頼の共同主義を支柱に
個人主義と集団主義の間に

千人会はセミナーの現場から生まれた維持後援会の新しい形体である。共同意識と参加意識の具体化である。経営に苦闘していた当時の飯田専務理事が多摩の丘で出会った人々との間に友愛と信頼を交換したいという願いから思いついた手法である。

新しい世代の会員を募ります。

◇昭和53年度末千人会状況

- 総数 一、五六四人
- 脱会者 一七
- 物故者 四四
- 実人員 一、五〇三

◇現在、会員は二、一五六名です
大学人 一、一八五名
社会人 三七九

◇新しく会員となられた方々

11名(第47回報告(申込順))
C 明治大学助教授 山元 洋殿

C 日本女子体育大学助教授 早弓 惇殿

A 創価大学教授 上村 学殿

終身 順天堂大学教授 中島 章殿

C 山梨大学教授 横田 忠夫殿

千人会入会状況(大学別) table with columns for university names and counts, totaling 55 members.

昭和54年2/3月現在

C 日本女子体育大学助教授 高橋 和之殿

C 練馬工業高校 大川 郁子殿

A 日本学士院会員 木村健二郎殿

B 日本女子大学教授 熊坂 敦子殿

B 筑波大学教授 阿部 斉殿

終身 鉄道機器㈱社長 吉田 要三殿

◇入会のごは
石田竜次郎先生定年記念樹よろしく願っています。
山梨大学教授 横田忠夫

益々の御発展を祈念申し上げます。 鉄道機器㈱社長 吉田要三

◇会費ありとうございます
54年2/3月(敬称略)
吉田修三、大即英夫、谷資信、小川洋輔、吉田公保、今井清一、吉川春寿、石井正博、板橋並治、大友賢二、玉野井芳郎、東洋、吉田耕作、丹下みさを、金子ハルオ、平岡勇、矢田俊文、稲毛彦、山正熊、廣瀬一彦、鳥居泰彦、藤巻正生、中利太郎、松山正男、新保清子、山口俊夫、松田正一、飯田修一、西川大二郎、遠藤平治、池田公麿、前島郁雄、穂山貞登、高橋潤二郎、山田昭房、相原光、浦上要三、本谷勲、吉阪隆正、板垣雄三、島田依史子、黒沼謙次郎、増谷和子、大岡信、黒沼謙次郎、賢治、西田貴子、萩原玉味、佐藤頌子、窪田庄十郎、斎藤真、昌谷春海、松本武子、松島千代野、力石誠之介、久世寛信、武田孟、井

(1ページよりつづく)

文化的個性、文化の持つライフスタイル——を見出そうとしているのが現代ではあるまいか。最後に、文学研究の未来について考えてみたい。これには大きく分けて二つの方向がある。一つはエスニック・ルーツで表わされるような個別主義の方向である。例えば、ヨーロッパ文学において、叙事詩や悲劇こそ最高の文学形式と見なす考え方を、そのまま日本の文学史にあてはめることはできないし、アリストテレス以来の文芸批評家たちが考えた文学理念で、近松の心中物や芭蕉の俳句を捉えることには限界がある。このように日本文学をヨーロッパ文学の基準で論ずることは極めてむづかしいが、残念なことには、われわれが使っている文学研究・文芸批評のターミノロジーや枠組は、そのほとんどがヨーロッパからの借り物である。われわれは今や文化的個性として、神話以来、日本文学の底を流れている原型的なパターンを明らかにすることが求められている。外国文学、とくにヨーロッパ文学をモデルにした文学研究ではなく、一つの構造なり生態を持った文学として捉え直すという意味で、これを私は文学生態学と呼んでみたい。

一方では、二〇世紀の文芸批評・文学研究には、分析的に要素に還元していく、という普遍主義の方向がすくよくく現われている。純粹

詩・純粹小説といわれるもので、詩あるいは小説でなければ表現できないものを取り出し、それ以外は切り捨てようとするものである。ここでは音韻学において音素が考えられているように、文学素というものを考え、それらの組み合わせから文学の構造を考える(文学原質論)。日本では夏目漱石がああの大「文学論」の中ですでに試みているが、彼をもっとしてもその試みは、いわば大建築の廃墟のような格好で現在に残っているにすぎず、どの作品を持ってきても立ち所に分析できるといような文学素を追い求めることは、ある意味では危険な夢でもあるだろう。

純粹個別主義を推し進めると一種の狭いローカリズムに陥り、自己満足の袋小路に入り込んでしまふだろう。しかし、ヨーロッパや中国の文学を研究し、内と外から日本文学を眺めることが可能な立場にあるわれわれが、文学に限らずわれわれの文化やものの考え方の中にエスニック・ルーツがまだ相当な形で生きていて、という強みを生かさない手はないだろう。個別主義と普遍主義という二つの方向をいかにしてドラマタイズするかが、われわれの文学研究の未来を考える鍵となるだろう。

(第一〇〇回記念大会セミナーの主題講演より。文芸・編集者)

原恵治、櫻崎彰男、中岡二郎、新澤雄一、中島力、脇田良一、今井裕之、高松正昭、遠藤卓夫、金山宣夫、富塚文太郎、箕輪成男、最上武雄、勢山秀子、中村妙子、坂本是忠、島美喜子、磯直道、松野賢吾、笠耐、三神勲、佐藤直子、外山崇行、古崎愛子、野澤農、小林望、子安宣邦、馬越徹、西川恭治、伊藤千秋、福田敦夫、村松林太郎、増沢利幸、門脇卓爾、荒川孝子、福永寿巳夫、足立美比古、久保亮五、唐勝、谷口汎郎、内藤博、智昇、五唐勝、山口汎郎、熊澤義宣、平野鉄太郎、梅村魁、寺中良二、勝見允行、肥前栄一、永野賢、那須宗一、中島徹、尾田幸雄、道本幸伸、富子勝久、人見宏、杉山

先日は千人会入会のお礼状をいただきました。館長先生自らのおことばに心温まる思いがいたしました。3月10、11日の学生年輪の会に4年生として参加させていただき、その折、入会の手続きをさせていただきました。考えてみればまだ社会人となっていないのに、少々、手続きが早すぎたのではないかと考えております。3月中はまだ大学生ですので一応4月からの入会とさせていただきます。

なお、4月からは郷里へ帰り私学の教師となることになりました。また機会がありましたらぜひ多摩の丘に行かせてください。セミナー・ハウス・ニュースも楽しみにしております。

3月18日 大川郁子 (昭和54年3月 津田塾大卒)

逸男、一松信、南美枝子、高橋誠、佐藤毅、中田良平、緒田原清一、中村孝之、山澤逸平、熊坂敦子、拓植敏治、石原忠男、鈴木昭、松澤正夫、小幡史朗、藤木宏幸、堀内睦子、加藤一郎、番ヶ瀬康子、岡村甫、白川和雄、北原宗彬、絹川正吉、鈴木基之、松尾弘、大西清、上野一、大泉充郎、山田良之助、天野一夫、北村嘉行、豊田陽子、倉沢進、岡村総吾、市川邦彦、柴田泰比古、牛島忠広、太田淳一、小竹豊治、土井恵子、牛丸一成、寿里茂、細井勉、工藤英明、永井道雄、松澤正夫、茅野良男、小林文男、小原啓義、原芳男、保坂栄一、平田道憲、萩原稔、加藤六美、若林玄修、浅野弥祐、丸山真男、小倉芳彦、菊地昌典、梶谷尚、村田晴夫、山元洋、平沢薫、木間仁、斎藤幸一郎、高瀬文志郎、瀬川美能留、向坊隆、池田義人、古川晴風、吉沢四郎、池田ヒロ子、福西基、安藤英治、手塚喬介、守屋美賀雄、谷口茂、村上千賀子、木田宏、大野京子、護雅夫、渡辺武雄、栗原俊記、中西久美子、小林弘、小山五郎、土居健郎、加藤閑子、田所光子、原田敏一、横田忠夫、大田未穂、京極純一朝、永振一郎、浦野伊和子、望月清司、大塚正夫、吉田要三、平木典子、益子正己、野々口格三、一乘信雄、佐藤慶幸、石井千尋、木村尚三郎、久保田浩、寺内礼治郎、村山松雄、藤井弥太郎、近藤薫樹

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

少ない額ですが、長く長く続けたいので、ごかんべん下さい。

矢田俊文

神奈川大学助教授 大友賢二

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

矢田俊文

館長喜寿祝準備基金の一万円と共に、お送り致しますので、よろしくお願ひいたします。

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

矢田俊文

大阪大学教授 茅野良男

4月から一年間ハーバード大学にまいります。来年度の会費を如何にいたしますか。できれば今年中にもお送りしたいのですが、専修大学教授 萩原 稔

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

矢田俊文

中央大学教授 吉沢四郎

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

美しい誕生日カードをありがとうございました。宮下先生のスケッチされたこの建物まで、寒風の中を、また熱い陽の下を宿舎から歩いて行った日を思い出しております。玉川大学教授 勢山秀子

矢田俊文

第6回国際学生セミナー

主題——文化接触と日本

——閉ざされた社会から開かれた社会へ——

期日——昭和54年3月19～21日

◆ゲスト講演◆

一九八〇年代における国際社会の変動と日本の対応
鹿野村総合研究所社長

佐伯喜一氏

◆セクシオン演習◆

A 日本語の国際性
国立国語研究所日本語研究センター長 野元菊雄氏

B 文化接触の場としての大学とその周辺—私の日本体験から—
立教大学教授 戴国輝氏

C 脱国家の文化交流
上智大学教授 三輪公忠氏

D 近代日本と留学
天理大学教授 石附 実氏

E 国際政治の変動と日本社会
東京外国語大学教授 中嶋嶺雄氏

◆運営委員◆

慶応義塾大学教授 広野良吉氏
東京大学助教 鈴木孝夫氏
早稲田大外事課長 山代昌希氏

③国籍別(計15ヵ国) 日本(109)
マレーシア、台湾(各4)、大韓民国、香港、フィリピン、インドネシア、ラオス、シンガポール、インド、ネパール、オーストラリア、スイス、スーダ別(計32校)

早大(慶大(各11)、東大(10)、津田塾大(9)、東外大(8)、上智大(7)、東女大(6)、お茶の水女大、ICU、成蹊大、立教大、同志社大(各5)、青学大、一橋大(各3)、横浜国大、東工大、聖心女大、中大、明学大、筑波大、東京水産大(各2)、駒沢大、東北大、広島大、九州大、千葉商科大、亜細亜大、国立音大、帝塚山学院大、立命館大(各1)、他に社会人10名

「国際学生セミナー」考

その序章から第6回まで—
日本にとって国際交流の問題が、今日的課題になりかけたとき、大学教育の中でこの問題を取り上げたのが国際学生セミナーである。アポロ11号の成功で人類が初めて月に立ったのが昭和44年。人類の

進歩と調和をうたい上げた万国博が大坂で開かれたのが昭和45年。その万博益金の残余財産で設立された万博基金の補助金をうけることによって、わが国際学生セミナーの発想は実現に至ったのである。昭和47年3月の第1回国際学生セミナーはそのような時代的背景の中で芽生えたのである。
第1回から第5回までは万博基金からの補助金によって運営してきたが、基金の関係でそれが打ち切られると、幸いにも文部省学術国際局長がこの国際学生セミナーを高く評価され、たまたま国際セミナー館も落成したときなので、第6回からは、万博に代って文部省の補助金をうけることになった。この短い歴史が示すように計画が実現するためには、そのときに親切的な支持者があったのである。

夫、東寿太郎、金山宣夫の諸氏の並々ならぬ協力があつたことを特記したい。わけても広野教授は委員長として鋭意企画の中心となり努力された。

テーマは、前回の「文化接触と日本」を引ききつぎ、副題として「閉ざされた社会から開かれた社会」を設け、日本における留学生の生活環境を視点の中心に据えて、指導教授と参加者が多角的交流を最大限に計りながら、日本はどのような文化交流の場であるべきか、そのためにどのような困難があるかを考察しようとした。このため当初の企画から、マレーシア、インドネシア、ネパールの三人の留学生にも参加してもらい、日常の体験を通じて得た問題意識を参考にした。

募集時期が大学入試の直前であつたり、学年末試験と重なつていたので、必ずしも楽観を許さなかつたが、応募者が一六〇名に達するという好成绩で、これを日本人学生は高学年を優先し、一五ヵ国の留学生二〇名をあわせ、合計一三〇名のセミナーとなつた。

初日は各指導教授から約五分ずつセクシオンに関する提題をきく共通セッションから開始した。

今回のゲスト講演は、第二日目に野村総合研究所社長佐伯喜一氏が、多忙の中を協力され、安全保障の問題を中心に80年代の国際社会における日本を論じられた。国民のコンセンサスが得られる政策をとる必要があることを指摘され、その国の軍事力が国際政治に与える影響力は低下することを示唆さ

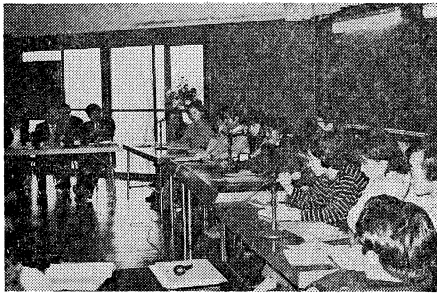
れた。そして米ソ等の大国間の関係から日本と各国との関係にふれたあと、世界の経済情勢と日本の戦略に言及され、地勢的および機能的な面から政策的な基本構想をまとめる必要性を強調された。

夕食後は特別セッションを設けて慶応大学鈴木孝夫教授から「日本の言語的鎖国状態について」の小講演をきく機会をつくつた。ことばは現代人の重要な道具であり、それは現代人といわれる鈴木教授の快調な講演が笑いのうちに進行した。言葉の障害で日本人が外国人に思うことがいえないことから生ずる誤解を解決するためにも、日本で勉強した外国人に就職の機会を与えるのがよいといった意見から、日本語を国連用語にしたらよいという提言まで、話が發展して参加者の拍手をあびた。

第三日目は、全体討議で各セクシオンの報告のあと、質疑応答が行われたが、残念ながら留学生の発言が少なかつた。しかし突然に議長に指名されたにもかかわらず、ネパールのアミラさんが時間をよく調整しながらテキパキと会議を進行させたのが印象に残つた。

今回は三日間よく討論し、よく勉強したので、最後のお別れ昼食パーティがいれば唯一のアトラクションであつた。食堂の心づくしのご馳走で疲れを吹き飛ばし、各セクシオンのスタンプで楽しい交歓のひとつときを持つた。

時は三月の卒業期だったので、卒業する学生に館長から祝いの記念品として、モットーの「生活は簡素に 思想は高潔に」の書が贈



最終日の全体討議：学生の議長団と報告者たち

られた。この印刷の書は故大浜信泉先生の筆になるもので、額とし

て食堂にかけてあることは周知の通りである。

第6回国際学生セミナーの企画運営に参加した一人として

運営委員長・成蹊大学教授 広野良吉

職業柄、年に五、六回は海外出張をする。その度毎に教授会出張許可願を提出し、同僚の許可を得なければならぬ。国内出張の場合には、出張届、欠講届だけで済むのに、なぜ海外出張は別扱いにするのだろうか。

キリスト教系の学校では、外国人も日本人教員と同じ資格で、教育、研究、学生指導に従事しているところが多いが、その他の教育機関では、外国人教員は「外人講師」と呼ばれ、単に授業を担当するか、個人的に学生を指導するだけである。

民間の銀行、会社などにおいても、海外企業との合併企業を除いては、外国人を正規の社員として雇用している企業は皆無である。日本の多国籍企業といわれる大手

民間の銀行、会社などにおいても、海外企業との合併企業を除いては、外国人を正規の社員として雇用している企業は皆無である。日本の多国籍企業といわれる大手



(上)ゲスト講演の佐伯喜一氏(右)
(下)卒業する学生にはなむけの記念品を贈る

「開かれた社会」とは単に外国文化ないし外国人に対して開かれているだけでなく、国内の異なった価値観、異なった思想、異なった性格、異なった集団に属する人にも開かれていることを意味する。そこでは画一性を排除して多様性が尊重され排他的な集団主義よりも個の自覚に基づく集団構成員の協力が要請されるのである。(紙面の都合で文意をとり短縮しました)

留学生と人際交流

Bセクション

(香港) Kwan Pun Fong

第6回国際学生セミナーに参加したのは偶然なことからでしたが、二泊三日の共同の生活と交流を経て、私は大変勉強になったと思っています。一口にいって、このような国際間の交流は、私たちが留学生にとって極めて重要な経験で、日本の教授や学生の一つの断面に触れ、学問的に交流し、相互の理解を深めることができただけで済む機会でもありません。私が参加したのはBセクションでしたが、話題の中心は日本人の国際観から日本政府の留学生制度の評価にまでおよび、いろいろな有意義な話し合いができました。

自分の母国から離れ、遠い日本に初めて勉強する留学生のほとんどは、最初に文化的衝撃を経験します。そしてその過程で、誤解が生じる機会が多いのです。そのような文化的不適合、生活習慣、言葉の障壁など乗り越えて、真の人間関係を築かない限り日本と日本人の本当の事を知ること、どうしてもできないと思います。

私は日本に来てもうすぐ二年になります。この度の国際学生セミナーのような国際交流を目的とする会合にもいくつか参加しました。そこで、日本の学界はほんとうに真剣に国際交流を望んでいることを知り、深い感謝を受けました。留学生は出来るだけこのような会合に参加するよう努力すべきだと私はいつも思っています。私たち留学生はある意味で、国際間

の文化交流の目的を果たす使命を背負っていると思うからです。留学生は遊んでいるばかりで何も勉強しないまま、日本政府から奨学金を貰っているという批判、また、留学生達は生活も苦しく、言葉もできなくて可哀想だという同情、これらほとんど一面の意見方であって事実ではないと思えます。問題の核心はむしろ、自分の母国の政治的立場抜きで、お互いに人間の一人として交流するということだと思います。そうするならば、真の人(または民)際交流が可能になると信じます。(橋大学・修士一年)

ひと月の後に

Aセクション 廣木優子

セミナーが終わって一ヵ月がたった。枯れがれだった戸外も、新緑に包まれた。そんな今になってセクションの仲間達から電話がかかってくる。まるで、セミナーハウスから持ち帰った問題の種が、いつせいに芽ぶき始めたように。今さら「日本人は国際人になれるだろうか」とは馬鹿げた質問かもしれない。現に、海外で活躍している日本人は沢山いる。しかし、国内で、外国語の能力を度外視した場での国際性となると、私は迷わざるを得ない。英語力イコール国際性という単純な図式はもはや許されぬ。今回のセミナーは、まさにそういう問題を提起してくれたのである。

留学生諸氏の日本語力からいうと、私達はかなり高度なコミュニケーションを持つことができるはずである。にもかかわらず、それ以前の段階でつまづくことが多いのはどうしたことだろう。どの国民であったとしても、その国民性の本質を理解することは非常にむずかしいが、留学生達はいつたいてい「本質的」なものに悩まされているのだろうか。単なる皮相的な偏見によるのではないか。また、彼らがつかつた壁が日本人や日本社会の特質から生まれたとして、私達はそれをどう変えてゆくべきなのだろうか。

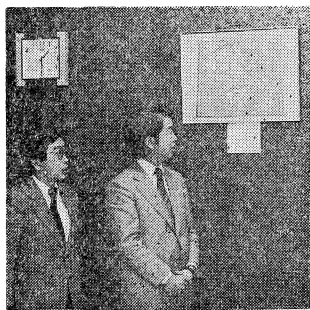
新しく大学にやってきた留学生に、一言「お国はどちらですか」と声をかけるのは、まだ基本的な人と人との関係の域をでない。その彼が二年、三年と日本で生活して、とても日本の社会にはいれないと感じはじめた時、「本質的」な文化が姿を現わすのである。今回のセミナーで気づいたのだから、日本人学生は、お互いの人となりをもみこんで討議の下地を作ることに時間をかける。話し合いにはいった段階では、各自の意見のあるあいまいさを伴った把握が前提となっている。そして、そのまま、論点が規定されることもなく、明確な立場からの意見の対立もなく、議論は流れてゆく。こうしたデイスカッションのやり方は、技術的に未熟というだけでなく、同族社会的な日本社会の体質と深く結びついているような気がしてならない。この体質を捨てることなしに、国際性を身につけることはできないものだろうか。答えはまだない。そして、その答えが出るまで、セミナーの仲間達との対話ははてしなく続くことだろう。(お茶の水女子大三年)

●香典返しのご寄付金

故石田龍次郎先生のご遺族から
金参拾万円のご寄付をうける

一橋大学名誉教授石田龍次郎先生は昭和54年1月11日に七五歳で逝去された。先生は著名な地理学者として多くの門下生を育てられ、それだけに大学教育には格別の使命感を持っておられた。ご遺族から故人が生前に交わりをされた方々に出されたご挨拶の文中に左記のような言葉があるのは、十分うなずけることなのである。

「故人は生前より日本の大学教育の行く末に想いを致すこと多く……師弟が膝を交えながら学び合う大学セミナー・ハウスのたたずまいに、ある種の理想像を思い浮かべていたようにも思われます」
2月28日、先生は宝池院龍城居士の七七忌の法要をすまされたのである。当セミナー・ハウスは先生の御霊の平安を祈りながら、先生が寄せられた教育愛の思いを



故石田龍次郎先生のご息
子(右)、桂の氏氏
(国際セミナー館にて)

忘れることはあるまい。

セミナー・ハウス・ニュース11号には、石田先生が「退官記念のコロキウム」と題して感想を書いておられる。昭和52年8月14日から二泊三日のコロキウムが当セミナー・ハウスで先生の退官記念として開催され、第二日目の夜は「地理学的思考へ」という記念講演が行われ、先生は11時まで二時間半の長広舌で退官をしめくられたのである。全国から参加した同学同門の三六人の学者と共に行住坐臥して、気のすむまで論じられたとのことであった。私は有史以来の退官記念の贈り物であるといつて、いままなお吹聴しているのは、ホテルなどで見られる退官パーティの風景に比べて、すばらしく高尚な発想であると思うからである。

先生は昭和43年から千人会員にご入会された。第40回共同セミナーには指導教授として「地域調査の意義の問題点」と題して全体講義をされた。先生はこの丘の一隅に退官を記念して数株の植樹をされた。昭和53年4月、門下生によって金婚を祝われた。その前後から病院生活と病床生活がつづいた。門弟達は6月に落成した国際セミナー館のセミナー室のために、ブトレマイオスの世界地図三面を額にされ、先生ご夫妻の金婚を記念された。先生の愛弟子一橋大学竹内啓一教授は先生の高潔な

温かい愛情をうけつがれ、学会やゼミでしばしば当セミナー・ハウスを利用されている。

石田龍次郎先生は本場にセミナー・ハウスを愛して下さった。先生を永く記憶しながら、私も老いごとであらう。先生は、生きてなお語って下さるからである。

(飯田宗一郎記)

●寄付金報告

54年2~3月現在

ご支援を感謝して拝受いたしました。

△一般寄付

五、八〇〇円 青山学院大学経営学部 羽田ゼミ殿

△植樹基金

二〇、四〇〇円 上智大学国際関係研究所殿

△視聴覚施設設備充実募金

二〇、〇〇〇円 産業能率短期大学 第6回八王子セミナー殿

△日本大学教授

四〇、〇〇〇円 栃原敏房殿

△国際学生セミナー

指導教授・運営委員殿 三、三〇〇円

△現物寄付

三、六〇〇円 慶応大学 西川ゼミ殿

△苗木三本

早稲田大学 新沢ゼミ殿

△東大教授

大内 力殿

△さざんか・すもも・あんず・はなみづき等庭木一本

同志社本部殿

●寄贈図書

53年11月~54年2月

「採集と飼育」11~3月号 日本科学協会殿

「教育心理」12~2月号 神保信一殿

「金融経済」No. 172~174 金融経済研究所殿

「近世のオーストラリア音楽」『国際交流』No. 18 国際交流基金殿

「社会学論叢」No. 78 『現代組織論』「学叢」No. 25 笠原正成殿

「政治経済史学」No. 140~145 政治経済史学会殿

「佐渡叢書」第13巻 松井源吾殿

「宇宙の果てへの旅」海部宣男殿

「スイス・アルプス風土記」『現代映画芸術』「笑い」 宮下啓三殿

「スクリーン・イングリッシュ」No. 1 『愛の名場面、名セリフ』 荒井良雄殿

「早稲田フォーラム」No. 33~34 早稲田大学広報課殿

「国際協力」11~12月号 国際協力事業団殿

「立教」No. 81~88 立教大学広報課殿

「逆流と順流」『中国古代の学術と政治』 小倉芳彦殿

「はちおうじの教育統計」 八王子市教育委員会殿

「SSI Journal」No. 32 早稲田大学システム科学研究所殿

「現代詩研究」No. 291 現代詩研究所殿

「同志社時報」No. 65 同志社本部殿

「エナジー対話 菊」

エッセイスタンダード石油広報部殿

「教育経済論序説」 尾形 憲殿

「脱走兵と動乱の満州」 松島正治殿

「戦後日本の政策目標の評価」 『Zur Typologie des Georg's Japant』 学習院大学殿

「白井佳夫の映画の本」 白井佳夫殿

「アメリカの女子職業と再教育」

「太平洋・アジア地域の教育と発展」『女性の職業と家庭のあり方』 林 潔殿

「植物系統進化化学」 福田 一郎殿

「銀行経営の系譜」『日本金融通史』(1)~(2) 朝倉孝吉殿

「数学史の世界」 村田 全殿

「歴史哲学」 神山四郎殿

「大学研究ノート」第32~35号 広島大学大学院教育研究センター殿

「西欧の顔・日本の心」 木村尚三郎殿

「資源涵濁と食糧危機」『現代の景気と恐慌』「私にとつての科学」

「資本主義 その発達と構造」 大内 力殿

「マックス・ウェーバー」 安藤英治殿

「多摩の丘の昆虫」 京浜女子大学生物学研究室殿

「日本文化紀要」第10集 日本精神文化・教育制度研究所殿

「社会科学文化」第18号 「人文自然科学研究」第16号 早稲田大学社会科学部学会殿

「研究報告」第45号 工学院大学図書館殿

「意味喪失の時代に生きる」 大塚久雄殿

「キリスト教と英文学」 小塩節殿

「日本税法体系」第2巻 北野弘久殿

卒業にあたって一言

私の大学生活とセミナー・ハウス

栗本英和

① 私と大学セミナー・ハウスとの出会いは、昨年5月に行われた「日常生活―そのルーツと展望」に始まります。何気なく過ごしがちである毎日を再検討し、その中にアイデンティティを見出してゆくには、どうしたらよいかを中心に多方面からのアプローチがなされました。

大学入学当時は、遊びの堪能の場としての学生生活に没頭、しかし専門領域に関する講義の比重が高まるに連れ、明けても暮れても自然科学、多くは数式じりりの反芻、また詰め込み講義・実験で大学と自宅との往復運動に陥りかけていた生活に疑問を感じ、大学生活の意味について考えようとしていた矢先のことでした。

一つのテーマのもとに、二十数校から集まってくる個性ある人間集団の情熱に魅せられ、多大な自己啓発を受け名古屋に帰ったことが印象に残っています。その後、もう一度参加したいと感じるもの、距離的ハンディキャップからなかなか足を向けられなくて残念です。

思うに、大学生という時期は生涯の中で最も大きな自由度が与えられた試行錯誤の場であり、その自由度はまた生活環境を異にする様々の人と触れ合うことで更に大きくなり、新たな問題意識を形成

する動機づけとなります。

② とかく、わが出身地は堅実、実質的、逆に、手堅く主体性に乏しいといわれ、そこで生まれ育ち、とつぶり名古屋人気質に漬ってきただ身にとつて、この共同セミナーは、いくつかの問題提起をしてくれました。それと同時に、受動的活動からは何ものも生みだせない、大学とは、自力で学ぶものといわれます。そうした人をつくる、そうした人のためにも大学セミナー・ハウスの存在は大きな意味をもつものと考えます。

(名古屋大学化学工学科卒)

② 作田一朗

昨年、「不確実性の時代」という言葉が流行した。我々の両親の時代と比較して本当に現代が不確実性の時代かは疑問があるが、従来の価値観に安心して寄りかかれなくなると人々が強く感じられた「不確実」という言葉がもてはやされたのである。私が大学生生活を送った七〇年代後半は、エネルギー供給や為替レートなど経済情勢が激変したアメリカ中心の自由世界を支えたアメリカ中心の自由経済秩序が少しずつ安定性を失い、経済成長という目標で日本社会を導けなくなった時代であった。一方、ディスコブームや海外旅行の大幅増加、週休二日制の定着などにみられるよう、日本社会にかなりの余裕がついた時代でも

あった。このような時代状況の中での自らの価値観を熱心に模索する若者が集まる場がセミナー・ハウスであった。

今後の世界がいかに不確実であろうとも自分にとって確実なことが一つある。セミナー・ハウスで学んだ人々が生き続ける世界であるということである。

セミナー・ハウスの生活は日常の学生生活では味わえない新鮮な体験であった。教師と学生が気軽に議論することができたし、他大学の友人を得ることもできた。異質の存在からカルチャーショックに似た刺激を受けた。演習後、深夜に至るまで大いに語りあった。大学を卒業するとセミナー・ハウスに集まることはほとんどなくなる。しかし、ここで学んだ人々は社会のあらゆる分野で活躍するだろうし、何年何十年の後に再会する機会があるであろう。その時、セミナー・ハウスの生活を一つの共同体験として連帯できるようにありたい。人と人が語りあい、互いに理解し、協力することが「我がの生きる不確実性の時代」を切り抜ける最良の方法である。

(東京工業大学制御工学科卒)

第2回

「学生年輪の会」のつどい

昭和49年5月に発足した「学生年輪の会」では、大学セミナー・ハウスと利用学生との間の信頼、協力関係の維持、学生相互の親睦と交流を目的として、昨年第1回「学生年輪の会」のつどいを開催した。今回も同趣旨のもとに3

月10日から11日にかけて行われ、昭和53年度共同セミナー委員長岡宏子聖心女子大学教授をお迎えして、学生年輪の会会員を中心とした学生36名が参加した。

岡先生は、人間の脳の構造とその働きについて具体的に触れながら、生涯教育の必要性等を話され、その後活発な質疑応答に入り、初日のプログラムは夜11時まで続いた。

翌日は岡先生をして「年輪OB」を囲んで話し合いがもたれ、最後に「学生年輪の会」の今後の活動方針について話し合い、幹事五人を定め昼食時の立食パーティを経て散会した。

昨年と比べて特に異なるのは、年輪の会を経て、現在社会人として活躍されている方々をお迎えしたことである。実社会から改めて見直した大学と学問の意義等についての意見をお聞きすることにより、自らの立場をより一層鮮明に把握することができればとの目的を持った企画で、ある程度の成果を取めたと思われる。

現在、「学生年輪の会」会員は

昭和53年度第3回共同セミナー委員会

昭和54年3月9日(金) 18時〜20時半/私学会館

昭和53年度最後の委員会は、別記14名の委員の出席を得て開催された。

主な議事は、本年度の共同セミナー(実施回数計4回)の総括と次年度(54年)下半期の計画について。次年度の年間計画の骨子は前回の委員会でその方針が了承されているので、議題の中心はセミナーのテーマ(内容)に置かれ

- 第104回(10月12〜14日)
- 「ルソーの芸術論」
- 第105回(11月9〜11日)
- 「家」と日本人
- 第106回(昭和55年1月11〜13日)
- 「動物の社会・人間の社会」

約一八〇人おり、大学共同セミナー参加学生が中心である。今後の活動に関する意見は多様で、まとまった結論は出なかったが、活動をより活発にする点について異存はなく、具体的な活動内容の企画・決定は幹事に任せられた形になっている。

幹事 林肇、阿部滋子、石坂尚樹、
作田一朗、前田光男
(東大4年 石坂尚樹記)

卒業制作の絵画を寄贈

2年8ヵ月にわたり、アルバイトとして宿直補助および交友館勤務で大活躍した多摩美術大学の酒井清一君が卒業制作の油絵(スタジウム・シリーズ)を本法人に寄贈した。

作品は縦二メートル、横一九メートルの大作で本館フロント横の壁面に飾られ、フロントを訪れる人々の目を惹きつけてくれている。また一階ロビーも全体に明るくなり、職員にも好評である。

なお酒井君は美術の教師として千葉県の中学校に赴任した。

事業部だより

2・3月の利用状況

2月は各大学の学年末試験も終り、セミナーの丘に再び活気が戻る。ゼミ回数は一、二六、宿泊延人数が三、七三三人。厳寒のこの月にゼミ回数が一〇〇を上廻つたのは開館以来はじめて。延人数も昨年同月をしのいでここ数年上昇気味である。後半は春休みに入る3月もゼミ回数が一〇九、宿泊延人数は四、八六九人と活況を呈した。これは3月の宿泊延人数の開館以来の最多記録である。また、3月が年度内三番目に利用者が多い月となったことも珍らしいことである。卒業を前に、あるいは一年間のゼミやクラブ活動の総括と反省に、当ハウスでの共同生活を選ぶグループの数が多くなつてきているのは、嬉しいことである。昭和53年度の利用状況の集計は次号で報告される筈であるが、3月末日をもつて、この一年間の宿泊者延人数は四万八、五三九人となり、また、開館以来一四年間の利用者は約五二万人を数えることとなった。

△交歓会寸描

●2月3日11節分にちなんで、夕食時に八大学一〇名が交歓。年男五名に「年女」も二名加わり、各グループから選ばれた鬼のチャンピオンに豆を投げ、全員が「福は内」を唱和した。なお、夜のセミナー室でのおやつ用に節分の豆

が各グループに供された。●2月9日11夕食時に八グループ二二〇名が交歓。この夜は明学大グリークラブ三五名が美しいコーラス二曲を披露。●2月17日11グループ二〇〇名が夕食時に交歓。新沢雄一早大教授が食堂に掲げられている恩師大浜信泉先生筆の当ハウスのモットー「思想は高潔に、生活は簡素に」について、また、法大安井ゼミで指導の甲山員司氏が恩師安井郁教授について、それぞれスピーチ。

●2月23日11夕食時の食堂で九グループ一五〇名が参加。和光大「障害者問題を考える会」の代表が同会の活動を紹介したあと、全員で「手話コーラス」を披露してくれた。また、学習院大シエルクスピエ劇研究会も練習中の芝居「マクベス」の一場面を演じた。●3月10日11第2回「学生年輪の会」のつどいを各九グループ二二名が夕食の食堂で交歓。松田武彦東工大教授のスピーチ、年輪の会の紹介のあと、青学大第二部聖歌隊が合唱を二曲披露。●3月30日11夕食時に一〇グループ一九二名が交歓。学習院大リコーダーゼミがリコーダーの素晴らしい合奏を二曲披露。また、一週間の英語研修の最終夜を迎えたELECセミナーの参加者全員が英語の歌を聞かせてくれた。

●3月31日11年度最後の日、夕食後に泊の一二グループ一七四名がしだれ桜の美しい中央庭園周辺でかがり火を囲み、食後のコーヒールを飲みながら交歓した。●2月3日11上智大学国際関係研

究所「一九三〇年代研究会」の三輪公忠教授など一〇名をお茶に。●2月18日11法大安井ゼミの学生一〇名を朝食会に、また、同日午後、早大新沢ゼミ二〇名と武蔵工大桑原ゼミ四名をお茶に。●3月11日11昨年末より入院加療中の松田武彦東工大教授がご夫人同伴で元気にゼミ指導で来館された。同夫妻と「学生年輪の会」ついで講演された岡宏子聖心女大教授を朝食会に。●3月24日11法大国際交流ゼミナールで指導に当たった米国のクエーカー研究者キャンビー・ジョーンズ教授、ルイス・ベンソン夫妻、石谷行法大教授を朝食会に。●3月29日11多摩地区看護教育研究会の都留伸子講師と参加者一九名をお茶の会に。

●2月23日11夕食時の食堂で九グループ一五〇名が参加。和光大「障害者問題を考える会」の代表が同会の活動を紹介したあと、全員で「手話コーラス」を披露してくれた。また、学習院大シエルクスピエ劇研究会も練習中の芝居「マクベス」の一場面を演じた。●3月10日11第2回「学生年輪の会」のつどいを各九グループ二二名が夕食の食堂で交歓。松田武彦東工大教授のスピーチ、年輪の会の紹介のあと、青学大第二部聖歌隊が合唱を二曲披露。●3月30日11夕食時に一〇グループ一九二名が交歓。学習院大リコーダーゼミがリコーダーの素晴らしい合奏を二曲披露。また、一週間の英語研修の最終夜を迎えたELECセミナーの参加者全員が英語の歌を聞かせてくれた。●3月31日11年度最後の日、夕食後に泊の一二グループ一七四名がしだれ桜の美しい中央庭園周辺でかがり火を囲み、食後のコーヒールを飲みながら交歓した。●2月3日11上智大学国際関係研

法政大学安井ゼミと

セミナー・ハウス

梅小路の紅梅と朝食会

甲山員 司

今年は何年にもない暖冬異変のせいか、二月半ばというのに大学セミナー・ハウスの梅小路もすでに梅の香がいつぱいに漂っている。この梅小路の一隅に昨年我々法政大学安井ゼミナールの学生が植樹した一本の紅梅がふくよかにつぼみをつけ、今にも咲こうとふくらんでいる。安井郁先生が法政大学を退官されるに際し、その記念として今まで大変御世話になった大学セミナー・ハウスに先生の好きな紅梅を植えさせて頂いたのである。ちょうど昨年我々が最終安井ゼミ合宿をこの大学セミナー・ハウスで行っているとき、先生は大手

術をひかえ慶応病院で毎日検査の苦しい日々を過ごしておられた。我は先生の手術が成功し再びこの大学セミナー・ハウスで共に合宿出来る日を祈りつつ植樹したことを昨日のように思い出す。昨年三月一日行われた手術は成功したものの、すでに古稀を過ぎられた先生の回復は必ずしも捗々しくなく、一年を経た現在なお自宅で療養生活を送っていらっしゃる。すでに昨年より安井ゼミナールは法政大学より正式に消滅してしまつた。しかし、残つた四年生が「何とか安井ゼミナールの灯をともし続けたい」との希望から、大学院生である筆者やOBが指導にあたり、今年一年安井自主ゼミナールを継続してきた。そして再び春合宿として大学セミナー・ハウスに御世話になったのである。事務局の方より「安井ゼミナールは今年もあるのですか？」と質問され、「ああそうか、我々の今回の合宿は自主ゼミであった」と改めて、我々の立場の特殊性に気づく有様である。

安井先生は今年も出席していただけなかった。しかし、来年こそ健康を回復され、再び紅梅の香匂うこの野猿峠で楽しく語り合える日の来ることを心より祈っている。こうした事情を推察して下さった飯田館長は、我々のために特別の朝食会を交友館サロンに設けて、心から歓迎して下さいました。いつものように業務課の方々が好意をよくだいて、安井ゼミは通算一六回を数えることができた。安井ゼミの合宿が大学セミナー・ハウスで行われることが当然のようになつて、我々の生活の一

部に完全になりきつていようである。(法政大学大学院博士課程) ●セミナー・ハウスを体験して 青柳秀敬 静かな樹々の間に点在する宿舍に滞在し、念願の英語セミナーに出席できたことは、私にとつての良スタートになりました。忙しい日常から解放されて、勉強に専念でき、まるで来た学生にもどつたような一週間でした。こうした施設が、多くの方々の善意に支えられて作られ、これまで維持、発展してきているのを見て、その貴重な存在を実感しました。このセミナー・ハウスを利用する人は、それぞれの立場で、こうした施設の良さを感じることでしよう。それだけに、もし可能でしたら、次の点について、ご検討いただけると有難いのです。 まず、食事のことですが、生野菜がよくだされましたが、野菜好きな者にとっては嬉しいことでした。ただ量が少ないので、おかわりできるようにしていただけたいです。 もう一つは、手洗いのことですが、これを男女別にしていただけではないでしょうか。別棟がわりでしたら、仕切りを設けるなど、なんらかの方法を考えていただければ幸いです。 小さいこと書きましたが、そうした理想をもつて大学セミナー・ハウスを作り、これまでにしてこられた方々のご努力に頭がさがる思いです。今後のご発展をお祈りいたします。(ELECセミナー参加者)

館長日記から

多摩の丘にも新緑の季節が訪れた。周辺は、すっかり開発されたが、この丘には雑木林が元の姿で保存され豊かな自然がある。若葉におおわれた丘のあちこちに山つつが咲き、こまやかな美しさを見せている。早朝から野鳥のさえずりがきこえる。そう快な夜明けをたのしむことができる。◆この3月で高齢のため退職された造園主任の西村治氏のお陰で、あじさいや雪やなぎの群生斜面が人工でつくられたり、松や椎の太木にも整枝の手が加えられ、自然を素材としながらも、新しい日本の風景がつけられた。多摩の民家・遠来荘が近代建築のセミナー・ハウスによく和合している。◆昭和49年6月に、故正田建次郎先生が理事長のとき、私は専務理事兼任のまま館長に選任された。そのとき朝日新聞は「もう一つの大学」と題して「今日の問題」欄に取り上げ、開館十年目を迎えた大学セミナー・ハウスの発展のしるしとして喜んで下さった。その筆者が論説委員永井道雄先生であることも、不思議なえにしている。◆昭和34年11月12日、四谷紀尾井町の福田家に、茅、大浜両先生など九名の学者を招き、大学セミナー・ハウスをつくりたいという止むに止まれぬ私の願望

を訴えた。この高級料亭を選んだのは、貧相な場所でも永遠の夢を語りたくなかったからである。このときから私の人生は「大学セミナー・ハウスへの道」を歩むことになった。それは現実の深層に入っており、最も原理的なものを創造しようとするきびしい精進の中で生きることであった。◆本号の記事が報ずるように、専務理事兼任の館長としては最後の日記である。昭和54年3月31日は年度最終日である。その夕べ、千人会員の法政山本満、青山学院深沢実両教授など一、二大学一七九名のゼミの学生達を交友館に招き夜ざくらの下でコーヒーパーティを行った。春宵をたのしむにぎやかな集いであった。学習院大のリコーダ音楽が興を加えてくれた。上智のリーゼンフーパー神父が館長と歓を共にしてくれた。◆現代は国も社会も大も転機に立つと、いわゆる時代である。4月7日の理事会は、大学セミナー・ハウスが転換期にあることを実証した。館長と専務理事を分解した。見事な実験である。重荷を軽減して細く、永く生きられるようにとの先達の温い配慮によるものと、つとめて了解している。そのことは、内村鑑三のいう「心のうちより出でたる新事業は常に健在にして常に永続す」という言葉に運命を托したいからである。愛と信頼による望ましい人間関係の絆を絶やしたくないからである。

利用状況

2月 2月 2月
2月 2月 2月
3月 3月 3月
四月 四月 四月
五月 五月 五月
六月 六月 六月
七月 七月 七月
八月 八月 八月
九月 九月 九月
十月 十月 十月
十一月 十一月 十一月
十二月 十二月 十二月

東京大学司法問題研究会*	畑井 義隆
明治学院大学教授	石川 信男
青山学院大学教授	寿福 真美
法政大学講師	秋山 智久
明治学院大学助教授	中里 明彦
津田塾大学講師	野田 房嗣
上智大学国際関係研究所	谷敷 正光
中央大学講師	杉原 敏房
駒沢大学助教授*	野崎 喜嗣
日本大学講師	加藤 敏子
駒沢大学美術部	洪谷 隆一
武蔵工業大学講師	笹森 健
大妻女子大学教授	加藤 一規
駒沢大学教授	田中 政男
青山学院大学助教授	矢野 誠一
明治大学商学部学生会	寺東 寛治
神奈川大学教授	桑原 洋
明治大学助教授	影山 儼一
青山学院大学助教授	中原 章吉
駒沢大学助教授	原 行男
千葉商科大学助教授	有賀 弘
駒沢大学教授	平野 文彦
立教大学教授	武蔵小宮公秀
早稲田大学講師	秋元 徹
上智大学教授	
明治学院大学教授	
法政大学法学部政治学科	
東京経済大学婦人問題研究会	
法政大学ニュースホステル研究会	
東京女子大学英語会	
津田塾大学講師	矢沢次郎
早稲田大学教授	西宮 輝明

共同セミナーその後

久保田正幸

「映画表現と人間―チャップリンと二〇世紀文明」を主題に第一〇一回大学共同セミナーが催されたのが、昨年11月24、26日。荒井良雄先生を迎えた我等Aセクションは、その後も、この機会を我々の出会いの始まりとして、月一回の割合で他セクション―白井佳夫先生指導との合同映画鑑賞会を荒井先生の計らいにより、学習院大学にて持ち、今年、3月23、24日両日には、再び場所を大学セミナー・ハウスに移し、チャップリンの代表作三本『キッド』『街の灯』『独裁者』―を見る機会を得た。

我々は、チャップリンの自伝を通じて彼の人間性を探るといふ試みを行い、その集約されたものとして、『独裁者』の最後の演説に注目した。その点において、『独裁者』全篇を今回見ることができたのは、わがセクションにとって、象徴的な意味をもつことになった。調整のズレもありがた、十分に話し合う時間がなかったが、各人にとって、それぞれ別な形にせよ、チャップリンに対して、映画に対して、そして人間に対して、新たな起点を見い出したことと信じて。それだけのものが、チャップリンにはあると思う。

今後、荒井先生の下に様々な形で、このAセクションを存続させていきたいと念じつつ、チャップリンの自伝にあるヘイマスの言葉で終えたいと思う。

To believe your own thought, to believe that what is true for you in your private heart is true for all men, that is genius. Who so would be a man must be a nonconformist.

(早稲田大学2年)

早稲田大学教授	美川 様子
立教大学福音キリスト者聖公会	
早稲田大学LEI	
早稲田大学国際学生友好会	
武蔵大学体育連合会	
明治大学教授	原 正彦
一橋大学教授	焔場 準一
中央大学講師	木下 徳明
東京都立大学教授	鈴木 二郎
早稲田大学講師	鈴木 二郎
東京都立大学教授	城座 和夫
武蔵工業大学助教授	桑原 哲郎
成蹊大学YMC A	
東京外国語大学講師	鈴木 二郎
法政大学教授	安井 郁
早稲田大学教授	寄本 勝美
早稲田大学教授	新沢 雄一
東京理科大学助教授	沢崎 守孝
東京都立大学助教授	鳴沢 実
芝浦工業大学建築工学科	
早稲田大学教授	成田誠之助
東京薬科大学教授	坪井 實
東京大学教授	青井 和夫
学習院大シニクスピア劇研究会	
東京都立大学教授	関口 晃
中央大学助教授	池田 雄一
東京通信大学助教授	清水 誠
電気通信大学助教授	狩野 紀昭
東京都立大学助教授	柳沢 治
法政大学教授	西川大二郎

東京学芸大学助教授 鈴木日出男

東京都立大学助教授 金子ハルオ

早稲田大学ポルタージュ研究会

明治大学講師 渡辺 昭夫

明治学院大学教授 神保 信一

明治学院大学教授 中山 弘正

早稲田大学現代社会研究会

女子美術大学教授 郡山 正

国際商科大学助教授 稲毛 教子

大月市立大月短期大学教授

小林 里次

女子聖学院短大講師 浜田 辰雄

職業訓練研究センター* 宗像 元介

横浜市立大学助教授 加藤 祐三

和光大学障害者問題を考える会

玉川大学同好会リーダーズストレー

ニング

都留文科大学助教授 川上 則道

移動大学八王子セミナー

第5回印度卒業論文研究会

東京天文台

松本享英語教育研究会

東京スクールオブビジネス

千早こどもの家保育園

お茶の水キリストの教会

新東京日産自動車販売

東京地方簡易保険局

千野製作所

横川ヒューレットパッカード

日本化薬*

立川スプリング

沖電気工業

予 告

●第一〇三回大学共同セミナー

主題Ⅱ空間と人間生活——自然・

人間の適正規模——

期日Ⅱ昭和54年7月13日、15日

△主題講演▽

京都大学教授 吉田光邦氏

トラベルジャーナル教育システム

情報処理振興事業団

多摩中央信用金庫*

全日本デパートメントストアズ開

発機構

三菱電気

住友スリーエム

ソフトウェアマネジメント

日野市職員組合

鉄鋼短期大学人材開発センター

日本電気コストコンサルティング

中村屋

ウエラ化粧品

京王プラザホテル

大沢ビジネスサービス

松下電器産業労働組合

【個人利用】

早稲田大学教授 戸沼 幸市

立正大学講師 石原 強

名古屋大学院生 田中 一尚

東京ガス不動産 米山 哲夫

中央大学助教授 村越 邦男

一橋大学助教授 石 弘光

中央大学受験生 増田 哲朗

国立音楽大名誉教授 熊谷 孝

東京学芸大名誉教授 松原 元一

【日帰り利用】

市川きよの学院

■3月

東京大学アイセック

電気通信大学機械系学科研修会

東京大学教授 朽津 耕三

東京大学科学史研究会

芝浦工業大学教授 十代田知三

早稲田大学法研若手研究者の会

早稲田大学教授 小林 寛

成蹊大学文化会

中央大学教授 那須 宗一

東京学芸大学助教授 鈴木日出男

東京大学助手 古田 元夫

慶応義塾大学英語会

中央大学辞達学会

青山学院大学理工学部聖歌隊

中央大学講師 奈良 俊夫

東京工業大学教授 松田 武彦

明治大学政治学を学ぶ会

東京理科大学工業英語研究会

青山学院大学第二部聖歌隊

早稲田大学教授 大槻 義彦

早稲田大学助教授 田村 皖司

早稲田大学助教授 小町谷照彦

東京経済大マーケティング研究会

東京農業大学助手 宮田 正信

明治学院大学講師 遠藤 興一

東京都立大学助手 落合 守和

一橋大学商学研究会 山田 昭次

立教大学助教授 佐々木弘明

横濱国立大学助教授 大久保典夫

一橋大学消費生活協同組合

東京学芸大学助教授 示村悦二郎

早稲田大学助教授 高橋 康之

立教大学助教授 示村悦二郎

東大比較文学・比較文化研究室

一橋大学婦人問題研究会

東京大学亀有セツルメント

早稲田大学助教授 大春慎之助

東京薬科大学合唱団PL会

早稲田大学講師 岩本 一美

駒沢大学映画会

法政大学国際交流セミナー

東京薬科大学剣道部

慶応義塾大学サイコロジ・ソサ

エッセイ

東京薬科大学合唱団

相模女子大学教授 五十嵐良雄

電気通信大学消費生活協同組合

法政大学教授 大谷禎之介

東京学芸大学教授 小林 弘

東京経済大学経済政策研究会

日本女子大学シニクスピアドラ

マゼミ

慶応義塾大学教授 西川 俊作

青山学院大学教授 坂井 正廣

東京農工大学消費生活協同組合

専修大学教授 望月 清司

青山学院大学教授 羽田 三郎

法政大学証券研究会

専修大学助教授 竹林 代嘉

東京経済大学書道部

早稲田大学外政学会 田村 恭

早稲田大学助教授 橋本 侃

神奈川大学助教授 辻 達也

横濱市立大学教授 原 彬久

国際商科大学教授 坂口 耕史

東邦大学講師 萩野 雅司

日本聾話学校 米山昭一郎

中央学院大学講師 宮川 淑

国際商科大学助教授

独協大学助教授

第2回「学生年輪の会」のつどい

第6回国際学生セミナー

日本電氣府中工場*

日本労働研究会

立川スプリング*

小西六写真工業

日本IBM

日電パリアン

国際企画

町田市役所

ソフトウェアマネジメント

情報処理振興事業団

第一印刷

光弘報社

近代セーブルス社

川崎教会

阿部中法律事務所

都立立川短大学生

産業能率短大講師

玉川大学講師 金子 佳代

東京工業大学学生 山田 善靖

【日帰り利用】 甲斐 隆

市川きよの学院 作田 一朗

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

米山昭一郎

宮川 淑

萩野 雅司

●編集後記

本号には昭和53年度最終の記事が掲載されていますが、本来ならば60号になるべきですが、臨時に法人ニュースとして発行されたため、61号が定期のニュースになりました。人間はいつも「時代」と「世代」の枠の中で生きていますが、変化の激しい現代にあって、セミナー・ハウスが常に教育の丘であることを知っていたら、どうなるニュースにしたか、編集者は心がけています。目に青葉がいつはいいです。さわかやかなニュース・レターとして本号をお読みいただければ幸いです。(能)